



TITLE:

「安寧の都市」の景観研究への試み

AUTHOR(S):

川崎, 雅史; 山田, 圭二郎

CITATION:

川崎, 雅史 ...[et al]. 「安寧の都市」の景観研究への試み. 安寧の都市 -- 医学・工学からのアプローチ (Liveable Cities) 2015: 108-114

ISSUE DATE:

2015-01-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193514>

RIGHT:

「安寧の都市」の景観研究への試み

川崎雅史 京都大学大学院工学研究科 教授

山田圭二郎 京都大学大学院工学研究科 特定准教授

本稿では、ユニットの活動について、筆者(川崎)が関係した設立の経緯と、景観や都市アメニティの分野を中心とした研究の視点から、あらためて「安寧の都市」について考えてみたい。

安寧の都市ユニット設立の経緯と趣意

「安寧」の意味を確認するために、簡単にユニットの設立について振り返る。2007年の頃より教育改革の概算要求を申請するにあたり、安心・安全のための都市づくりを目的とした都市工学系のテーマを模索していたころ、当時の工学研究科長の西本清一先生の勧めもあり、医学部との医工連携のテーマを模索する方向で検討することになった。主として、医学部側は笹田昌孝教授(当時、医学研究科人間健康科学系専攻長、現滋賀県立成人病センター総長)、野本慎一教授(安寧の都市ユニット 副ユニット長)、工学部側は谷口栄一教授(安寧の都市ユニット ユニット長)と川崎雅史教授などにより、申請から2010年の設立までの準備を行うことになる。

ユニットは、安心・安全、アメニティ、健康なくらしが成熟した安寧の都市をめざすために、「人間健康都市科学」という新たな医工融合の学問領域の創成と、大規模災害や高齢化社会などの都市の複合的な課題に取り組む人材の養成、地域社会組織と連携した実践的教育をめざすことになる。

医工両者の裾野の共感

そもそも、まったく異分野である双方がこれまでにない医工連携の模索をはじめたのは、極めて明快な理由からであった。

医学側は、「医者は、病気になった人の原因を特定して最良の治療や看護を施し、病人を治癒させる。しかし、やっと退院しても、不健康な生活に

戻りまた病院に通う人も多い。都市や社会環境のあり方が良くなないと、本当の意味で人の健康は達成できない。医学が個人の身体から病院までの範囲を超えて、都市のあり方までをも模索することは重要な課題である」と言及し、三世代が住む健康な都市の重要性など、日常の社会のあり方についても検討事例として指摘した。

一方、工学側は、「これまで都市施設の建設や都市計画においては、機能や経済を第一に、人のスケールを超えた施設のスーパースケールで都市づくりを考えてきた。高齢化社会や大災害の到来を踏まえて、人の肉体や精神の内側までも視野に入れた健康な都市づくりの考えは新鮮なテーマである」と考えた。

これによって、両者にとって必要な、人から都市、都市から人への双方の視野を共感し、安寧の都市ユニットへの思いを寄せるにいたったのである。

実現までに3年余りを要したが、ユニットの目的と教育効果、そして体制など、ユニット像の理念とあり方の議論を積み重ねることになった。まず、学問領域のまったく異なるお互いのことを知るために、教員や関連分野の講師を双方から招いた研究会を実施し、学問分野の接点をさぐった。これによって、都市体験におけるストレスや脳血流の測定などの身体の科学的測定、防災避難のシミュレーション、精神医学と健康、医療施設と都市計画など、ユニットの領域の範囲と主要課題が絞り込まれた。ユニットがめざすべき融合分野である人間健康都市科学の輪郭がみえはじめ、理想像をシミュレートした。

「安寧」という言葉に込めた意味

このような教育研究の内容を描くなかで、ユニットの看板名をどうするかを考えることになった。概算要求への対応もあるが、医学と工学の両者の融合を確認でき、使い古されていない新しい言葉をユニット名に表現したい。防災、健康、アメニティといった環境から人までの包括的な内容を含むキーワードを探し、結果として「安寧」という言葉を提案するにいたる。人と環境との関係性のなかで、穏やかな生活や生息の場所を探してきた人間環境系の景観論において、「安寧」はしばしば使用される言葉でもある。若干のわかりにくさのデメリットはあっても、新しさと豊かな拡がりのある概念として命名した。

さらに、ユニットの教育内容への専らの関心は、「地域と共に成長する教育ステージ」という概念であった。この背景には、低減する人間力の向上をいかに考えるかという課題があった。ついては、机の上だけで考える教育環境から脱して、つねに地域と密接な関係をもち、社会現場での体験を基

盤にして学ぶクリエイターたちの教育課題として還元し、地域が教育のステージと一体化してダイナミックに動く教育環境を提案することになった。

これは、まちづくりや都市計画における住民参加などにおいては特段新しい概念ではないかもしれないが、社会人と一般学生を対象とする混合教育の効果は、地域における実践の質の向上とともに一層の期待ができるものであった。

さらに、ユニットはあくまで学生の教育が中心であるが、若手研究者の育成も重要であると考えた。当初は、新分野の研究者が5年で育つか否か、若干の不安もあったが、若手特定教員や研究員の方がたの活躍や実績は、教育のみならず著しいものがあった。

緩やかな融合をめざして

発足後のユニットの活動の成果の詳細は、他稿に記されているのでここで繰り返さないが、ユニット長、副ユニット長、特定教員の方がたのご尽力により、当初描かれた目標像を概ね達成できたことに深く感謝したい。少々残念な点は、社会人学生に比べて一般修士学生の履修者が予想より少なかったことである。一般学生の履修の負担上やむを得ないことでもあり、今後の反省点でもあろう。しかしながら、社会人を中心とした多くのクリエイターを輩出できたことは、大学と地域社会とのつながりを生み、今後の教育研究へのフィードバックが大いに期待できる。

研究・教育の融合については、重要な視点であるが、当初から大きな改革や一体的な融合を無理なスピードではめざさず、お互いの研究交流を自主的に進め、無理のない分野から緩やかに連携していくという姿勢で進めた。筆者の経験では、異分野の融合は難しく、無理をするとフラストレーションが溜まり、かえって反発を招くことになる。

緩やかな融合と学問分野の熟成は長い時間を要するものであり、この分野は今後、若手教員や研究員を中心に広く浸透するものと期待できる。医学と都市工学の両方があって、人と社会の本当の意味での安寧が達成されるという当初の信念をもって、今後の教育研究に励みたいと思っている。

「安寧の都市」の景観に関する研究

さて、「安寧の都市」というテーマに関して、この5年間、景観設計学研究室で取り組んできた研究の概要を、簡単に紹介したい。

「人—社会—環境」の三本柱と「景観」

安寧の都市ユニットでは、心身の健康、自律と主体的意思に基づく「人」の安寧、自然・人為災害のリスクマネジメント、都市アメニティとまちづくり、医療と健康都市の確立に基づく「社会」と「環境」の安寧という「人—社会—環境」の三本柱の安寧の実現が目標に掲げられた。

「景観」の視点から「安寧の都市」にアプローチするさい、対象となる景観とはまさに、この「人—社会—環境」の相互関係のなかに成り立つものにとらえられる。景観とは「環境」の総体的な眺めであり、同時に、これを契機に形成される「人」の心的現象でもある。また、「社会」のあり方やその活動は当然、そこでの景観に影響を与えずにはおかない。

いま、日本各地で景観は劣化・崩壊の危機にある。では、「人—社会—環境」の三本柱による「安寧の都市」とのかかわりから、この問題の所在をどのようにとらえたうえで景観研究にアプローチすべきか。

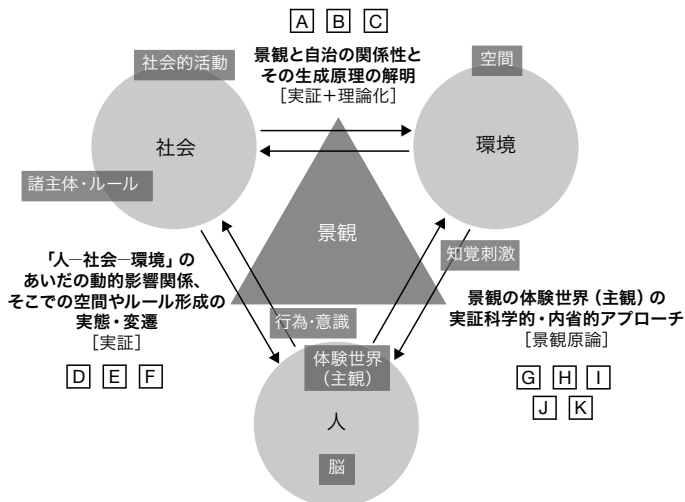
「安寧の都市」に関する問題の所在——景観の視点から

かつての自然村的社会では、所与の環境的・技術的・社会的制約条件のもとで共有されてきた一定の価値規範（同質的志向）と人びとの「共同」の作業が、結果として、地域の景観を成り立たせてきた側面が強くあった。地域社会もそのように「自ずと治まる」かたち（自動詞的自治）で成り立ってきた。しかし、現代の社会は、多様な出自・価値観の人たちが集まる異種混交の社会である。そこでは、かつての「同質的志向」や「共同」は旧来のかたちそのままでは成り立たないし、そうした与件のもとに成り立つ社会を多くの人びとは望みもしないだろう。

こうしてみると、景観が成り立つための所与の条件はいま、不在にみえる。産業構造変化、超高齢化、人口流出・減少、財政逼迫などの社会をとりまくメガトレンドは、その条件の成立をより困難なものにしている。では、こうした状況下でなお、これからの景観が成り立ちうる条件はなにか。

一つは、異種混交の現代社会の多様な主体が対等な協調的關係のもとで「きょうどう」し、これからの景観や地域のありようを自覚的かつ実践的に模索するという地域像である。そこでは、「自ら治める」自治（他動詞的自治）を基盤とするローカル・ガバナンスの内実が実践的に模索され、変化しつつ動態的に再構築されていくことになる。多様な主体が対等に地域の「環境」や「社会」の形成にかかわろうとするこの動態的なガバナンスは、輻輳し

資料2 「安寧の都市」の景観研究への試みと成果



- A** On the interactive relationship between sustainable landscapes and local governance: interdisciplinary approach to "milieu"……3)
- B** 地域景観と地域社会の相関構造及び景観の内的システムの生成発現に関する実証的研究……1)
- C** 基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基盤の再構築に関する実証的研究……2)
- D** ため池の空間管理を巡る地域社会システムとその変遷(未発表)……5)
- E** 下北沢の商業系街路空間における地域的ルールの形成に関する研究……6)
- F** 京町家における空間認識とその獲得過程に関する基礎的研究……8)
- G** 近赤外線分光法(fNIRS)による脳血流データを用いた景観の感性評価に関する基礎的研究……9)
- H** 景観評価の神経科学的検討: fMRIを用いた画像認識からのアプローチ……11)
- I** fMRIを用いた景観画像認識時における脳の共賦活領域の解析……14)
- J** 「なつかしさ」体験の諸特質に関する研究……16)
- K** (仮題) 認知症における空間の認知と意味構造に関する研究……19)

つつ変化し、景観を生成する「人-社会-環境」の動的な関係性にたいして、構造的な親和性が高いと思われる。

もう一つは、多様な価値観を認めつつ、それでもみんなにとって大切な「共通の関心事」(一般意志)として、景観がもつ「人」に固有の意味(人間的意味)を深め、「やっぱり景観は大事だ」という共通理解をもういちど「社会」に取り戻すことである。

景観について議論するときによく聞かれるのは、「景観は人それぞれの好みの問題だから、それに縛られるのはおかしい」、「価値観は多様だから、景観の価値を共有するなんて無理だ」といった悩みである。しかし、価値観はほんらい、人びとの生き方や社会のあり方と深くかかわっている。そして、

価値は所与の条件として与えられるものではなく、私たちが語り合い、発見し、ねりあげていくべきもののはずだ。

現在、価値観の多様化、個の尊重といった体のいい言葉が表面的にだけ語られ、「われわれは、なにを大事にして生きるのか」といった根本的な問いが避けられがちだが、こうした事態を乗り越えたいと思うのだ。

「安寧の都市」の景観に関する研究の概要

以下、研究の具体的成果に踏み込む紙面の余裕がないので、当研究室で取り組んできた研究テーマを列挙するかたちで簡単に紹介したい。

前者の研究アプローチは、景観を形成する「人—社会—環境」の動態的な関係の実態とその変遷を、地域の景観を構成する個々の「空間要素」とそれにかかわる「社会的活動」——所有・管理・活動（法制度・慣習などを含む）とその社会的枠組み（個人—国家レベルまでのさまざまな主体とその「空間」への関与）にまで落とし込んで詳細に把握する実証研究である。これは、山田が行政学・公共経営学・社会哲学といった分野の専門家との共同研究を通じて開発してきた方法論である。^{1)~4)}

この方法論や視点をベースとした研究は、「ため池の空間管理を巡る地域社会システムとその変遷——兵庫県稲美町天満大池を対象として」⁵⁾、「下北沢の商業系街路空間と地域社会の動態的持続性に関する研究」⁶⁾⁷⁾、「京町家における空間認識とその獲得過程に関する基礎的研究」⁸⁾などである。

後者の研究は、その根底に、私たちが景観に接するときの主観的体験の生き生きとした感じ、そのリアリティを大切にしたいという思いがある。景観が「共通の関心事」となる手がかりがそこにあると考えるからだ。その主観的体験の豊かな質——趣や風情、意味、情緒などに接近する研究の方法としては、次の二つのアプローチをとった。脳神経科学の極めて実証科学的エビデンスにもとづくアプローチ（医工融合型研究）と、主観的体験のリアリティをできるだけ保ったままその質の核心を取り出そうとする主観的（内省的）エビデンスにもとづくアプローチである。

実証科学的エビデンスにもとづく脳科学研究としては、「近赤外線分光法（fNIRS）による脳血流データを用いた景観の感性評価に関する基礎的研究」⁹⁾¹⁰⁾、「景観評価の神経科学的検討：fMRIを用いた画像認識からのアプローチ」¹¹⁾¹²⁾、「fMRIを用いた景観画像認識時における脳の共賦活領域の解析」¹³⁾¹⁴⁾などがある。

主観的エビデンスにもとづくアプローチとしては、哲学（現象学）の「本質

観取」の方法を参考にした「なつかしさの想起による空間・体験・感情の質に関する研究¹⁶⁾」がある。また、現在進行中の研究として、発達心理学の「エピソード記述」の方法——主観的体験の記述の妥当性・一般性を、間主観的に高めていく方法などを参考にした「認知症患者の空間認知とその意味構造に関する研究¹⁷⁾」がある。

これはまだ、学術論文(査読付き)としてかたちにてできておらず、この点は反省点である。しかし、この5年間で取り組んだこれらの研究は、筆者らが考える景観研究の中心的課題に真っ向から挑んだ挑戦的で独創的かつ実りおおいものとなり、一点の悔いもない充実した研究活動であった。学生、元学生諸氏も懸命にこれらの研究課題に取り組んでくれた。謝して記す。

参考文献

- 1) 藤倉英世・山田圭二郎・羽貝正美 著「地域景観と地域社会の相関構造及び景観の内的システムの生成・発現に関する実証的研究」、土木学会論文集D、第66巻第3号、394-413頁、2010年
- 2) 藤倉英世・山田圭二郎・羽貝正美 著「基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基盤の再構築に関する実証的研究」、土木学会論文集D3、第68巻第3号、160-179頁、2012年
- 3) K. Yamada, H. Fujikura, M. Hagai and K. Nishi, On the interactive relationship between sustainable landscapes and local governance: interdisciplinary approach to "milieu", Landscape & Imagination, UNISCAPE, pp.631-636, 2013.
- 4) 藤倉英世・山田圭二郎・羽貝正美 著「風景分析のための方法とその成果——旧開田村の事例を対象に」、『風景とローカル・ガバナンス——春の小川はなぜ失われたのか』早稲田大学出版部、247-286頁、2014年
- 5) 「ため池の空間管理を巡る地域社会システムとその変遷——兵庫県稲美町天満大池を対象として」(高山恵梨子 修士論文[未公表]、2012年2月)
- 6) 「下北沢の商業系街路空間と地域社会の動態的持続性に関する研究」(中内和、修士論文、2013年2月)
- 7) 中内和・山田圭二郎・川崎雅史 著「下北沢の商業系街路空間を巡る地域的ルールの形成に関する研究」、土木学会景観・デザイン研究講演集(9)、229-240頁、2013年
- 8) 田中ひかる・山田圭二郎・吉村晶子 著「京町家における空間認識とその獲得過程に関する基礎的研究」その1〜その3、日本建築学会大会学術講演概要集、7081-7083、CD-ROM、2013年(田中ひかる、卒業論文、2013年2月)
- 9) 「近赤外線分光法(fNIRS)による脳血流データを用いた景観の感性評価に関する基礎的研究」(松本純也、修士論文、2014年2月)
- 10) 松本純也・山田圭二郎・精山明敏・吉村晶子・川崎雅史・久保田善明 著「景観に対する情動反応及び評価に関するNIRSを用いた室内脳科学実験」、土木学会景観・デザイン研究講演集(8)、156-166頁、2012年
- 11) 「景観評価の神経科学的検討：fMRIを用いた画像認識からのアプローチ」(大崎可織、医・精山明敏 教授研究室、修士論文、2014年2月)
- 12) 大崎可織・山田圭二郎・松本純也・中井隆介・岩田博夫・精山明敏 著「fMRIを用いた景観評価の検討」、日本生理学会雑誌、第76巻第2号、89頁、2014年
- 13) 「fMRIを用いた景観画像認識時における脳の共賦活領域の解析」(松本純也、修士論文、2014年2月)
- 14) 松本純也・山田圭二郎・精山明敏・川崎雅史 著「fMRIを用いた景観画像認識時における脳の共賦活領域の解析」、土木学会景観・デザイン研究講演集(10)、114-119頁、2014年
- 15) 山田圭二郎・西研 著「風景の人間の意味を考える——「なつかしさ」を手がかりに」、『風景とローカル・ガバナンス——春の小川はなぜ失われたのか』早稲田大学出版部、211-245頁、2014年
- 16) 玉井瑛子・山田圭二郎・川崎雅史 著「『なつかしさ』体験の諸特質に関する研究」、土木学会景観・デザイン研究講演集(10)、267-271頁、2014年(玉井瑛子、修士論文、2014年2月)
- 17) 「認知症患者の空間認知とその意味構造に関する研究」(中条匡臣、修士論文、2015年2月予定)